

Basal bolus treatment 施行例における 超速効型インスリンの ミチグリニドへの切り替え

後藤 尚, 平塚いづみ, 松田亜希奈
(秋田赤十字病院代謝内科)

Key words ▶

Basal bolus treatment
SUIT
ミチグリニド

要 旨

Basal bolus treatment (BBT) 施行例における超速効型インスリンのミチグリニドへの切り替えについて、その可否を 1,5-AG により判定し、その予測因子について検討した。切り替え後約 3 ヶ月の時点での 1,5-AG $10 \mu\text{g/mL}$ 以上だった切り替え可能群 (36 例) は切り替え不能群 (30 例) と比べ、切り替え直前のインスリン分泌指標が有意に高値、罹病期間、超速効型インスリン用量が有意に低値であった。ROC 曲線下面積の比較から、secretory units of islet transplantation (SUIT) は FCPR, CPR index より切り替え可否予測に優れ、正診率からみた至適基準は SUIT 17 (感度 59%, 特異度 92%) とされた。Logistic 回帰分析からも、SUIT は罹病期間、超速効型インスリン用量から独立して、切り替え可否の最適予測指標とされた。

○はじめに○

近年、増加の一途をたどる糖尿病患者に対して、その治療法も変化し続けている。DCCT (Diabetes Control and Complications Trial), UKPDS (United Kingdom Prospective Diabetes Study), Kumamoto Study などによって、厳格な血糖コントロールが糖尿病の合併症の発症・進展を抑制することが明らかとなり¹⁾⁻³⁾、2 型糖尿病に対しても basal bolus treatment (BBT) が積極的に用いられるようになってきているが、その継続の可否についての指針は具体的で

ない。超速効型インスリンの中止に際しての問題として①離脱難航の際、高血糖となり得る、②特に SU 薬を使用する際には低血糖への配慮も必要となる、③離脱可否の判定にインスリン分泌能力の多寡を知ることは重要であるが、これはできれば良好な血糖管理下に評価されるべき指標である、などが挙げられる。これらの問題を解決する方法の 1 つとして、BBT での糖毒性解除後に超速効型インスリンを速効型インスリン分泌促進薬であるミチグリニドに変更する方法の有用性は報告されている⁴⁾⁵⁾。しかし、ミチグリニド

への切り替え可否の予測因子として何が最も優れているのか、またその基準について検討した報告はまだない。

今回、超速効型インスリンからミチグリニドへ切り替えた 66 例において、secretory units of islet transplantation (SUIT)⁶⁾ を中心に、超速効型インスリンからミチグリニドへの切り替え可否の予測因子、およびその基準に関して検討したので報告する。なお、本論文中の HbA1c は日本糖尿病学会の換算数表により算出した NGSP⁷⁾ を用いた。